

---

# 困難から逃げ出すための100の方法

B B B

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

困難から逃げ出すための100の方法

### 【Nコード】

N7279P

### 【作者名】

BBB

### 【あらすじ】

気づけば、異世界トリップ。美形もファンタジーもお話で十分！怖いことが何より嫌いな女子大生ゆうが考えたのは「よし、逃げよう」。逆ハーレムも魔法使いにも興味はあっても、安心が一番！そんな超保守派のゆうが、なんでか封印された悪魔キノスラと島流しに合うことになって・・・平安とは程遠いサバイバルファンタジー。逃げようと思えば思うほど、裏目に出る人生なんていりません。

## 第一話 臆病者の混乱

そもそもいきなり逃げたのがいけなかった。

もしだれかを殺すことになったとしても、あの瞬間に戻るのなら戻りたい。

恐怖に震える体を押さえつけるように、ゆうは滝のように流れる涙を気にする余裕もなく膝を体に近付けて一層縮こまりながら思った。

ゆうがここ、イヴァニエナに召喚されたのは20日程前のことだ。

神聖イヴァニエナ共和国は、君主ヴィクトール・イヴァニエナが統治する異世界の部族国家だ。

この20日で分かったことは、イヴァニエナには魔法があること、騎士と王様がいること、呪いが存在すること、そしてゆうが異世界から召喚されたこと、

そして最悪なのは、どうやらゆうはこれから殺されるだろうということだった。

森嶋ゆうは臆病だった。

頭が悪いわけでも、性格が悪いわけでもなかったが、何より箱入りのお嬢様育ちであって、

それが元々の小心者で臆病な性格に拍車をかけた。

正確にはその気性が正される機会を与えられなかったとも言える。

森嶋家は歴史の教科書まで遡れば有名な家系で、代々医学を生業としていた。

つまり由緒正しき御典医の家系であって、ゆうはその7人家族の末っ子として生まれ育った。

近所の子にはやしたてられれば、家に逃げ帰って部屋で3日はめそめそし、

柵越しに犬に吠えられただけで、下校する道を変えて30分余計に歩き続け、

トイレの花子さんの本気で怖がり、小学校で行われる合宿に行きたくないと泣いて筆筈にしがみつく12歳の我が子に、

森嶋家の両親と兄弟は、ほとほと呆れた表情を見せ合い、

途中でその性格を矯正することを諦めた（中には諦めきれなかったものもいたが）。

そしてなるべく、荒事の無い世界で生きればいいと一貫教育の学校にゆうを入れた。

そのまま20歳まですくすく育ったのが森嶋ゆうだった。

森嶋ゆうは小心で、優しい箱入り娘だった。

少しばかり頭が良く以外にも好奇心旺盛な一面もある努力家だったが、

その全ての注釈を上回るほどに、とてつもない臆病者だった。

話は20日前にさかのぼる、とある事情からとある高台から飛び降りた森嶋ゆうは気づけば見知らぬ豪華な豪華な石造りの建物の中にいた。神殿の聖なる泉の中だったらしいが、仔細は知らない。

泉と言ってもゆうはなぜか濡れていなかったし、目の前には指輪物語もまっさおのローブを着た魔法使いと、鎧をつけた貴公子風の人と、聖女めいた銀色のドレスを着た女の人と、今思えば王様だった威厳のあるが若い男の人と、その他何人かの人間がいた。

「なんで、枯れたはずの泉から召喚が成功するんだ！」

「これは吉兆と出るか、それとも・・・なんにせよ素晴らしい魔術の成功ですね」

「まさか、そんな・・・」

神殿の小さな中庭にできたくぼみ、これを聖なる泉というらしいがそこに倒れるゆうは意味が分からなかった。分からなくって、気絶したかった、そして目が覚めたかった。

そんなゆうにおかまいなしに魔法使い風の男の人と、王様風な人と貴公子風の人が、ざわざわと言い争っている。

ゆうは空気に敏感、臆病者ゆえ場の空気に敏感なのだ、そして瞬時にここではおそらく歓迎されていないと悟った。そして気絶したくなかった。

目の前にいる人たちが自分を歓迎していない、そして自分がどこにいるか分からない、しかも尋常じゃなく分からない。箱入り娘のゆうにとって人生最悪の瞬間だった。少なくとも、そのときはそう感じた。

まっさおな顔色に気付いたのだろう、貴公子風の人がゆうに近づいてそして下半身を今だ地に投げだして起き上がることも忘れたように肘をつくゆうの目の前で膝をついた。

「お初お目にかかります、ドレーク・サイゼライと申します。異世

界から参られた姫君」

そう言つて微笑とともに手を差し出した。隠しきれなかつたほんの少しのぎこちさのある、けれども優しげな笑みを浮かべたその顔は、肩までの金色の髪の毛にふちどられ、なんとつかまるつきりヴェーグのモデルのような優男風的美男子だった。細面に、アーモンド形のブルーの瞳、優美な眉に、細く柔らかく整つた鼻梁。一ミリのぜい肉もついていない、美しい顎。

そんな花の顔かんはせにゆうは、怯えた。尋常じゃないことが起こっている、と悩がサイレンをならしたからだ。

さっきまで日本の片田舎にいたのにいまはどこぞの神殿の中庭にいて、モデルみたいな美形の外人騎士があいさつをしているなんて！  
！！おかしい！！！！絶対におかしい！！！！と。

そしてそのまま気絶したのだった。

## 第二話 臆病者の脱走

目が覚めた時には、見知らぬ天井と天蓋が・・・ということではなく、気づいたら、自分の左手がぶらぶらとしているのが見えた。

ええ、なにが起こったの？手がどうしてぶらぶらしてるの？ここはどこ？

混乱している頭に急に音声が戻ってくる。

「だから、召喚は必要無いと言ったはずでしょう！」

「まさかこんな子供がやつてくるとは思わなかったのです！コードラの碑文には猛き召喚獣の絵巻がのっていたのでしょ？！」

「だからそんなおとぎ話を信じているのがそもそもおかしいだろうっ！？」

「火急の自体とは言え、いかがなんでしょう、この娘の姿形では使えない」

心臓がどくつと一はねして、瞬時に頭が冴えた。驚きにまぶたが音を立てて開きそうになったけれど、ゆうの本能は薄目を開けていた瞳をゆっくりと慎重に閉じた。慎重に、慎重にそう無意識になえながら。

頭の中を大量の疑問符をかけめぐるのを意識しながら、ゆうは息をひそめた。

「陛下、怖れながら申し上げます。姫君をどこぞの部屋にお連れしたいです。僣んでいるとは言え、どこに人目人耳があるか存じませぬゆえ」

頭の上からダイレクトに聞こえた。そして、声だけじゃなくって振動が・・・ってことは。

長い髪が垂れた頭を幸い、まだ目が覚めたことに気づかれてないみたい。一筋の冷や汗がひそかに背中に流れたような気がした。

「・・・っ。そうであったな、ドレークそいつをどこぞの人目につかぬ部屋へ・・・人払いをしておけ！」

自分を抱き上げた腕は、ままならぬながら礼の形をとったらしいことを感じながら、

堅い腕らしきものを抱きあげられた力の抜けた体を意識しないように、ゆうは状況を伺っていた。

この騎士みたいな人たちに、自分の目が覚めていないふりが気付かれていないか戦々恐々としながら。

じつと、じつとしていれば危害は加わらないのかもしれない、とにかく今は。

意識すれば絶叫してしまいそうになる混乱の中、思わずひたすらに息をひそめたのは声が出なかったのか、それとも臆病者の本能かは分からなかった。

「お師匠様、この件は魔法塔の方に報告はいかがいたしましょうか、もともと・・・」

今だに続く中庭での緊迫感をはらんだささやきあいからだんだん離れていくのを感じながら、ゆうは死んだふりっこういうことを言うのかなと場違いなことを考えた。

降ろされたのはどうやら柔らかなベットの土だった。

ドレークらしい腕が離れて部屋から出て行って、そうして部屋から離れるには十分な時間がたったことを確認して、ゆっくりと瞼を開けた。

他の人が部屋にいるみたいなのはないらしい、と怖れていたことを確認してゆうは一息をついた。

とにかく今は、ゆつくり一人で何がどうなってるのかを確認したかった。

部屋はいや屋敷中はゆうを歓迎しないかのようにしんと静まり返っていた。

ベットが置かれていたのは、ホテルのような一室で、簡単だけれど中世ヨーロッパのお城の中のような厚い絨毯と重厚な家具が少し置いてあった。

そしてその向こうには窓があり、そのさらに向こうには庭園らしきものがすぐ近くに広がっていた。

一階なのかな？そんなことを思いながら半身を起して、一人きり取り残された部屋の中、窓に見えた景色を長い間眺めていた。いつのまにか暮れゆく夕日が美しかった景色には、月が昇っていた。

大兄によく「童顔でもないのに年下に見られるのはしつかりしてない腑抜けだからだ！」と言われたその顔に、呆然としたような土気色の表情をはりつけたまま、ゆうは決意した。

「・・・逃げよう」

ゆうが慎重に辺りを確認して、泥棒のようにしげみにもぐりこんでいった庭園のその天辺の空には、赤と青に輝く巨大な二つの月が冴え冴えとした光をはなっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7279p/>

---

困難から逃げ出すための100の方法

2010年12月31日04時24分発行